

有限会社OK牧場

養豚経営の品質向上・効率化のためのトレーサビリティ

(品目：豚肉)

1 対象事例の概要

(1) 畜産におけるトレーサビリティ

養豚の飼育段階における履歴情報の活用については、すでに昨年度の報告書にて十和田湖高原ファームの取り組みを紹介した。養豚では珍しい個体管理を行う先進事例であり、意義深いものであったと思う。しかし、IC タグを用いた個体管理を全国的に広げるにはまだ時間がかかるだろう。養豚業の現状に即したトレーサビリティシステム導入を検討するには、よりリーズナブルに仕組みを構築できることと、システム導入による効果を、消費者や取引先からの信頼性の向上のみならず、生産品質を向上させるという目標も達成できるようなソリューションになっていることが望ましい。

そうした意味で、本事例は興味深いものとなっている。昨年度事例と同じく生産情報公表 JAS の認定を受けた養豚業者であり、母豚と飼育豚の管理にシステムを上手く活用している事例なのである。

(2) OK 牧場について

OK 牧場は三重県津市にあり、生産工程管理者として、東海地区で初めて生産情報公表 JAS 規格認定を受

けた養豚農場である。この認定は、グループ農場を含めた 8 農場と(株)三重県四日市畜産公社、(株)三重県松阪食肉公社で「OK 牧場 JAS 豚肉生産グループ」を構成し、平成 17 年 2 月に取得したものである。



生産情報公表豚肉認定証

OK 牧場は、もともと小菅植物園という造園業を営んでいる会社だったが、造園に必要な堆肥のために豚の飼育を始め、その頭数をだんだん増やしていく過程で、造園業を辞め、養豚に本格的に参入した。社名は、大里という地域(O)、小菅社長(K)の頭文字で「OK」となった。

規模は、母豚が本農場 1650 頭に加え、協力農場に 130 頭を飼育している。協力農場には社員が 2 人入り、場所を借りて養豚を行っている。在庫数はおおよそ 18,000 頭(平成 18 年 2 月末)で、母豚と合わせて 2 万頭ほどを飼育しているということになる。年間、母豚 1 頭あたり 22.5 頭の出荷があり、年間出荷頭数は約 4 万頭ほどになる。

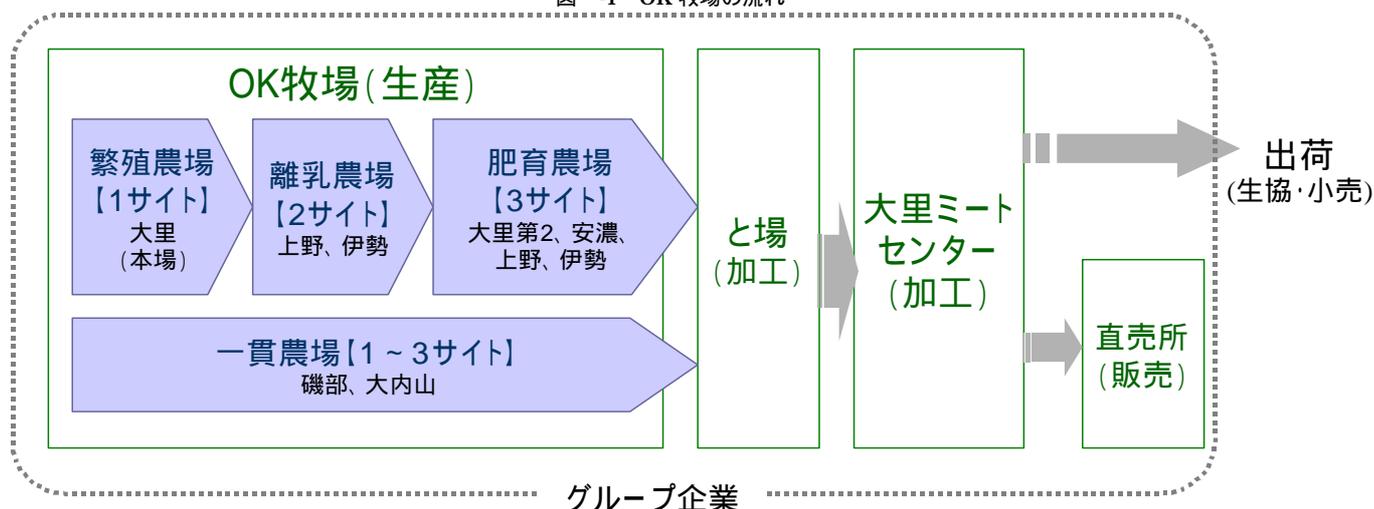
飼育管理は、基本的にスリーサイト方式で豚舎のオールインオールアウトを行っている。

スリーサイト方式とは、生後 20 日齢位までを肥育する繁殖農場サイトワンと、20 日~70 日齢位までを肥育する子豚育成農場サイトツー、70 日~180 日齢位(出荷)までを肥育する肥育農場サイトスリーを別々の地



街道に面した、OK牧場の直売所。はっきりなしにお客さんが訪れ、精肉などを買い求めていく。この奥に牧場がある。

図 -1 OK牧場の流れ



域に設置することで、病気の感染を防ぎ、それぞれの日齢にあった肥育環境でストレスを防ぐという肥育方法である。そのため、一斉に受け入れと出荷を行なうオールインオールアウトができ、行き届いた清掃・消毒によって常に衛生的な豚舎を維持することが可能となる。但し、各農場に人が必要で人件費がかかるため、いいところを伸ばして、人件費をカバーしなくてはならないという面もある。

OK 牧場は、大里、上野、伊勢、安濃、磯部、大内山と農場を持っている。まず、大里の農場で繁殖を行い、離乳するまで飼育する。ここが1サイト目となる。離乳後、上野、伊勢の農場に移動して肥育する。そこが2サイト目。その後40kgほどになった子豚を大里、上野、安濃などにある肥育農場(3サイト目)に移動させて肥育している。磯部農場と大内山農場は繁殖から肥育、出荷までが一貫して行われている。

また、「農場からテーブルまで」という意識をもって、OK 牧場で生産された豚は、グループ企業の大里ミートセンターで処理されている。敷地には直売所も併設されている。販売先は、生協がメインで、直売所、スーパー・デパートなどの小売店となっている。

2 トレーサビリティ導入の背景と経緯

JAS の導入以前から、OK 牧場と大里ミートセンターは、トレーサビリティという意味ではなく、与えている飼料、使用した薬、どのプログラムで飼養しているといった、ある程度の履歴は残していた。

「スリーサイト方式をとっているとすべての農場を直接管理できないので、各農場の状態を追跡しようということで始めました。本農場での投薬や飼料の情報を次の農場に送って、次の農場でもその次の農場に対して、こういう豚だという情報を送るシステムを作ろうということで4年ほど前から始めました。」(有限会社 OK 牧場 小菅専務、以下「」内同じ)

その後、松阪食肉衛生検査所が県のモデル事業としてトレーサビリティをやるため、一緒に取り組もうという話が持ち上がった。

「我々としても、その当時やっていたことの延長です。やりましょうということになりました。衛生検査所としては、どういう薬、飼料を使ったのかということが知りたいということでした。そして、これを県のホームページで公開しようということになりました。今、三重県ではうちのほかにもう1社が公開しています。」

その流れがあって、「生産情報公表 JAS 規格」(本章では、『JAS』はすべて生産情報公表 JAS 規格を指す)の申請に取り組むこととなった。



小菅専務

「JASの申請は、取引先からの要請といったことではなく、我々のセールスポイントにしていこうという自主的な意識が大きな動機でした。弊社の本農場は養豚業者にしては珍しい、居住者の多い町中にあります。周りの住民に対しても、きちんとした業者だということを理解してもらいたいという思いがありました。」

さらにこのトレーサビリティ導入の背景には、OK牧場の「健康でおいしい豚」を育てたいという思いがある。

「うちは無投薬などを売りにはしていません。きちんと管理しながらワクチン等を活用しています。豚が死んだり、病気になったりしたら困りますし、病気になった豚がおいしいのかという疑問もあります。もちろん、薬漬けの豚がおいしいとは思っていませんが、病気を薬で叩いて、健康にすることがおいしい肉を出荷することにつながると思っています。ただ、病気がなくて薬を使わないということが最高だと思います。それを我々も目指していかなければならないと思っています。」

トレーサビリティシステムの導入は実はそうした豚の健康管理に重要な役割を果たしています。我々は健康でおいしい豚を育てることが使命だと思っていますから、システムはそれに役立つものでないといけません。」

OK牧場では、履歴を管理するシステムとして、日清丸紅飼料株式会社の「豚歴」を採用しているが、この導入のきっかけも、やはりJASの申請のときであった。

「トレーサビリティシステムとして、『豚歴』を入れたきっかけは、もともと日清丸紅飼料さんとお付き合いがあったことです。種豚管理システムのMNFIS（エムエヌフィス）を入れていたのです。JASの話が持ち上がったとき、日清丸紅飼料さんにきてもらって、JASにあったシステムということで話をさせていただく中で、肉豚管理の『豚歴』も入れることにしました。」

出荷を迎える豚がどのくらいいるかについては、MNFISというシステムでも確認が可能である。MNFISも日清丸紅飼料が提供しているシステムだが、母豚、豚房単位での登録でないため、おおまかな在庫しかわからない。そのため、豚歴のほうが詳細な在庫を確認することができる。

「もともと豚歴は肥育管理をするためのシステムですので、肉豚からデータを見るという形式になっています。逆にMNFISは母豚からデータを見ていますので、農場管理という面で使いやすく、わかりやすくなっています。豚歴は飼育管理の面で分かりやすいので、2つを併用するということが多いですね。」

その当時、日清丸紅飼料では、その半年ほど前に豚歴が完成しており、既に初期トラブルをなくしたシステムができていたが、OK牧場向けにオンラインのASP形式でカスタマイズするという提案から始められた。

最初の提案後、豚歴はかなりのカスタマイズが行われた。もともとの形から大きく改良され、そのカスタマイズを元にオリジナルの豚歴そのものもバージョンアップしたため、OK牧場で作った形が、現在の豚歴の標準となっているほどである。例えば、治療情報の厳密な管理は現在の豚歴になってから採用されたものである。基本的には、日清丸紅飼料が、OK牧場からの要望（「使いやすいようにここを変えて欲しい」とか「こういうデータ入れたい」など）を受け入れる形で進んだ。

「日清丸紅飼料さんは、こちらの相談に乗ってくれたので良かったです。今後は、日清丸紅飼料さんから飼料を購入した履歴とか、獣医師とのやりとりなどを入れるようにしていけば、総合システムという意味での完成形に近づけるのではないかと思います。」

開発費用は、納得のいくレベルに落ち着いた。

「最初15万円程度という話だったんですが、最終的には7倍くらいになりました。でも、コストパフォーマンス的には安いんじゃないかと思っています。豚歴にしてもMNFISにしても、あれだけのシステムを他でやろうとすると、もっとかかるんじゃないでしょ

うか。日清丸紅さんと話をする前に、他のシステム屋さんに見積もりをしてもらったら 5000 万円かかると言われましたし、他のパッケージなら数百万円かかりますから。豚歴の場合は、カスタマイズを含めて百数十万円でしたので、安かったと思います。」

システムはオンラインの ASP 方式であるため、日清丸紅飼料側で豚歴のアプリケーションが入ったサーバを準備してもらい、OK 牧場ではインターネット接続環境とその端末になるパソコンを準備するだけで済んだ。初期導入後にかかっている費用は、毎月の使用料金のみとなっている。毎月の使用料には、サーバ管理費などのほか、問い合わせ対応やプログラムの更新費用も含まれている。現在、入力担当者の入力用端末と、本農場（大里）、伊勢の肥育農場の合計 3 台の端末で利用しており 3 ユーザーでの契約となっている。

3 トレーサビリティの検討内容

（1）システムの対象範囲

OK 牧場のトレーサビリティの範囲は、豚の出生記録から出荷までを行う OK 牧場での生産段階から、グループ企業のと場や大里ミートセンターでの加工段階の記録・管理を経由して、生協、直売所、小売店に出荷されている。

このように、OK 牧場が一貫生産を行っているため、川上の事業者はなく、川下はと場、大里ミートセンターとなり、その川下に生協、直売所、小売店があるという形になっている。

（2）識別単位とその識別記号

OK 牧場で使っている「豚歴」での識別単位は、個体ごとではなく、基本的には豚群ごととなっている。OK 牧場には、現在、豚房が 1400 程度あり、1 豚房あたり 6 頭から 60 頭が入っている。JAS 規格に合わせて、30 頭以下での豚群管理を行うため、60 頭のところは 30 頭ずつに分けており、36 頭のところは 30 頭と 6 頭に分けて、というよう記録されている。この場合、識別単位は分けられた 1 豚群となり、1 豚群の頭

数は必ず 30 頭以下となっている。1 つの豚房を記録上 2 つに分けた場合、豚房内の片方の豚群の個体の耳にタグをつけることで、2 つの豚群の識別をしている。

「JAS の制約で 30 頭以上の群になってはいけないというルールがあるので、この分別を実施しています。JAS 認証が制定される際の農水との話し合いのとき、大きい農場では豚房ではなく豚舎で分けてくれないかとお願ひしてきたんですが、認められなかったのです。最初から JAS の規制が 30 頭となると分かっていたら、豚舎を作るときに豚房をそのように設計したんでしょうけど、JAS はずっと後で決まったルールですからね。今後、豚舎を作ることがあれば、その辺も考えて設計しますよ。」

豚群管理を行い、出荷時、豚群識別番号をつけることとなる。豚群識別番号は 10 桁で、出荷年月日（6 桁）+農場番号（2 桁）+豚群番号（2 桁）となっている。この豚群識別番号は、飼育期間の豚群がもとになっているため、30 頭以内の豚群が 1 単位となる。

現在、OK 牧場では個体ごとの識別管理は行っていない。

「と場が協力してくれないと個体識別管理はできないと思います。また、個体識別のためには IC タグを読みとれる機械などを入れないといけませんから、個人経営レベルでは難しいだろうと思います。進んだと場がある地域はいいんでしょうけど。それに、小分け段階で個体識別管理をするというのは、すごい手間がかかりますが、その分高く売れるというわけでもありません。」

トレーサビリティの精度を考えると、個体識別管理が理想になるが、コストに見合う回収が望まれない状況では、やはり導入は難しいようである。これは取り組み主体のポリシーや状況に応じて機動的に変わっていくものであるが、畜産のトレーサビリティの識別単位についてはなお議論の余地がありそうである。

(3) 生産段階の内部トレーサビリティ

生産段階では、出生年月日、管理者、薬品の投与・添加情報、与えた飼料の情報などに加えて、どの農場で生まれ、どこで育ったのかという移動履歴が含まれている。

履歴の記録は、識別単位である豚群単位で行われている。出荷までの間に豚群の組み換えは、スリーサイトの移動に加えて、2 サイト目を前期離乳と後期離乳の2段階とし、30頭を18頭・12頭に分けるため、合計4回行われていることになる。この組み換えは、成長の個体差によるばらつきを整えるために行われるが、別の豚群の豚が入ると、その豚群の投薬情報に新たに加わった個体の投薬情報が追加され、日齢が離れた個体だった場合、その豚群の日齢の幅が広げられることになる。

「Aの豚群の1頭がある投薬を受けた場合、Aの豚群はすべてその投薬を受けたこととなります。そして、A群の中の1頭が、他のBという豚群に組み込まれた場合、B群の豚もすべてその投薬を受けたことになってしまいます。」

日齢の幅について、JASでは、1つの豚群の日齢を3週間以内にまとめることが求められており、最も若い豚と最も年をとった豚の日齢が21日以上離れてはならないため、組み換えを行うことで日齢差が21日を超えてしまう場合、JAS外の豚群になってしまう。

「基本的には豚舎ごとに日齢は近いんですが、1頭でも他から日齢の離れた豚を持ってきた場合には、その豚房はすべてJAS外になってしまいます。やはり群管理だと1頭でも日齢が離れた豚が入ると、それに引っ張られる形でその豚群全体が日齢にばらつきがあるということになりますからね。ただ、JAS外でも飼育履歴は残していますから、最終的にJAS外、JAS内となっても、違いは出荷日齢の差だけということになります。全頭の2/3ほどがJAS規格で、1/3がJAS外になっています。」

JASで求められる管理項目は投薬と日齢であるが、OK牧場ではこれに加えて飼料についても履歴を管理している。

「一番大事なのは、どういう時にどういう飼料を与えたかということですので、それが項目の最初にあり

一括	豚房	サイクル	稼働初日	現頭	在畜日数	最終作業日	稼働詳細
<input type="checkbox"/>	豚房-1	2	2005/03/16	13	47	2005/04/19	表示
<input type="checkbox"/>	豚房-2	2	2005/04/19	11	14	2005/04/25	表示
<input type="checkbox"/>	豚房-3	2		0			表示
<input type="checkbox"/>	豚房-4	1		0		2005/04/19	表示
<input type="checkbox"/>	豚房-5	1	2004/10/19	10	156	2005/04/19	表示
<input type="checkbox"/>	豚房-6	1	2004/10/25	14	189	2005/04/19	表示
<input type="checkbox"/>	豚房-7	1	2004/10/25	15	189	2005/04/19	表示
<input type="checkbox"/>	豚房-8	1	2004/11/02	9	181	2005/04/19	表示
<input type="checkbox"/>	豚房-9	1	2004/11/02	11	181	2005/04/19	表示
<input type="checkbox"/>	豚房-10	1	2005/03/16	22	47	2005/04/19	表示
<input type="checkbox"/>	豚房1	1		0			表示
<input type="checkbox"/>	12番目	1		0			表示

日次処理画面

豚舎	サイクル	稼働日	在畜日数	現頭	生年月日
豚房-1	1	2004/11/02	181	11	2004/08/29-2004/08/10

生産履歴一覧画面

作業内容登録画面 (左: 投薬、右: 移動)

豚舎	サイクル	稼働日	在畜日数	現頭	生年月日
豚房-1	1	2004/11/02	213	0	2004/08/01-2004/08/15

ます。薬の履歴は項目的には最後です。疾病の履歴は残りませんが、薬の種類を見れば、どんな症状だったかはわかります。生年月日は記録されていますので、日齢が何日の豚がどのくらいいるかということは豚歴のデータから出せます。」

具体的なデータ入力の流れを見てみると、まず農場で、野帳と台帳に作業内容を記入してもらってから始まる。

「農場では、何か作業をしたら、野帳に書き込んで、その後で台帳に書き写してもらおうように書いてあります。もし、野帳を持って歩けない場合は、手帳に書いておくようになっていまして、もちろんそれも台帳に書いて提出してもらっています。」

この台帳の原本は、FAX で当日の夕方までに事務所に提出することになっているが、遅くとも翌朝一番には送信してもらっている。伊勢の農場については、豚歴が使える端末があるため、そこで入力してもらった上で台帳の原本を FAX で提出してもらっている。伊勢以外は手書きの台帳を FAX で送信するため、読めないことがあるが、最終的には電話などで問い合わせ確認を行っている。

「野帳・台帳データを何か別のアプリケーションで入力しておくという方法も考えられますから、将来的にはすべての農場で豚歴を入れなくても、打ち込んだデータをこちらに送ってもらって登録するということができるのかなと思っています。紙で残すということは、汚れたりすることもありますから、パソコンで管理するのが楽なのかなとも思いますけど、パソコンを使える人がまだ農場には少ないんですよね。」



農場での野帳記入

畜産の業界でも、パソコンに対するリテラシーが課題のひとつとなっているようである。しかし、紙ベースでの記入に頼らざるを得ない環境でも

ある。

「養豚の現場では、携帯端末などを使った直接入力は難しいと思います。水や汚れに強い端末があればいいですが、安いものではないでしょうから。」

たとえば日清丸紅飼料では、入力端末として PDA の利用実験をした経験がある。

「電池がなくなって、そこまでのデータがとんでしまったり、手袋をしているとキーがうまく押せなくてなかなか使えなかったりします。また、豚が騒いでいると手から落としたりすることもあるって大変でした。」(日清丸紅飼料㈱ 藤本隆司さん)

このようなことを考え、鉛筆書きが一番確実だという結論になった。また、「手間がかかることはしてもらえない」ため、いかに早く正確に書くかを重視して、現在はコード化した数字での記録を行っている。

「野帳に記録するのは、治療をした豚房や移動した豚房だけなので、本場の 50 豚房を移動するというのが一番作業量の多いケースになります。オールアウトした場合です。移動と比べて、治療・投薬は記録回数が少ないですね。1 つの豚舎で 30 豚房ありますが、その内のいくつかの豚房をやったかということを書いていきます。ただ、病気が出てみんながかかるとすごい入力数になりますけど。」

システムを導入した現在、入力を正確にやればきちんと正確に情報が出てくることになる。農場と入力者が別々にしていることで、客観的に見て、正直に記録ができていると考えられる。入力側が大事にしているのは、購入した薬と使った薬の在庫が合うことなどである。

「農場側で薬を使ったことを隠したいと思って申告しなかったら、その時点でトレーサビリティができているとはいえなくなりますから。」

豚歴の担当者は、豚歴だけでなく MNFIS での作業のほか、飼料の注文にいたるまで農場に関することすべてを受け持っている。そのため、作業量が非常に多



システム担当者と入力環境

くなり、豚歴を入れた後、自宅でも残業することがあるほどになっているそうである。各農場の情報は、本来は農場単位で入力しなくてはならないと感じているそうだが、パソコンに慣れていない人が少ないということがあります、現実には担当に作業が偏る結果になっている。

「トレーサビリティに関する作業としては、MNFISでの作業が結構多くて、ほぼ一日中使っているくらいです。MNFISでは1週間分の指標を出したりする仕事があります。豚歴を触っているのは1日4時間くらいで、ほとんどがデータ入力です。ただ、月曜日は土日にたまったデータを入力しなくてはなりませんので、ほとんど一日豚歴での作業になります。特に、移動履歴の記録は大変で、離乳後の子豚移動は上野農場から一度に300頭くらい入ってきたものを各豚房に6頭ずつ細かく入れていかななくてはならないので、それが大変ですね。(OK 牧場 入力担当者 樋口さん)

(4) 一歩川下への記録と加工・流通段階を通じた識別

この豚群ごとの生産情報が豚群識別番号とともにFAXでと場に連絡され、加工段階である大里ミートセンターにも連絡される。大里ミートセンターでは、豚群ごとでの加工を行っている。

生産段階のOK 牧場からと場、と場から加工段階の大里ミートセンターへの記録は、豚群識別番号とで確認が可能である。

まずOK 牧場からと場への記録の伝達は豚群識別番号と個体の履歴情報を提供している。出荷と同時にと場に伝達するのは、豚群識別番号と、豚を搬送車に積み込む際の個体の配置図と、生産履歴申告書(誕生日

や使用薬剤等の記録)の三種である。

これを受けると場では、入荷の際に、対象となる豚群に、JAS番号という管理番号を付与する。これは1日ごとに替わる連番で、豚群識別番号とは1対1対応するように付番される。番号を記入した札を豚にかけて、配置図と豚群識別番号を確認しながら係留所に入れていく。この時に豚群単位の管理だけではなく、一頭一頭の識別ができるように連番をふる。識別番号ごとに1~30程度までを振ることになる。

次にと場から大里ミートセンターへの枝肉の出荷時には、出庫伝票と格付け明細表という形で識別のための記録が伝達される。出庫伝票にはJAS番号、豚群識別番号、頭数が記載され、格付け明細表には格付け日、と畜日、豚群識別番号、そしてと場で振られた個体の識別番号が記載されている。

このように識別のための記録の伝達が行われているが、OK 牧場では比較的頭数の多い豚群で管理しているため、たとえ、大きい店舗に出荷する場合でも1つの豚群の履歴を伝達するだけで済む。そのため、店舗で1日に管理する識別番号は基本的に1つとなっているのが現状である。つまり、この方式で処理できている間は、店頭で陳列する際、店舗でリパックする際にも複数の識別番号が混ざらないように留意する必要はないということになる。

「最低でも10頭以上の単位での出荷と決めています。そうしないと、大里ミートでの小分けも大変ですから。本場でも600頭が1週間以内に販売されています。」

この方式だと、1つの豚群がいくつかの出荷ロットに分かれる場合、出荷するロットごとに番号を与えているわけではないので、直接の販売先やその販売先で識別管理し、流通履歴を記録するには不都合が生じるかもしれない。

ただし今のところ、大里ミートから小売業者に直接販売されるので、あまり流通履歴を記録するニーズはないし、またあえて出荷ロットごとに固有の記号を与えなくても、混合して区別ができなくなって困ることはない。そういうわけで、この事例の場合、販売先においては豚群管理番号による識別となっている。

この事例では加工・流通段階でも豚群単位での取り扱いとなるため、生産段階の OK 牧場から加工・流通まで、豚群識別番号によって、履歴のトレースが可能となっている訳である。

このように、畜産のトレーサビリティシステムでは、と場との連携が重要となる。

「松阪と場と四日市と場がありますが、グループとして協力していただいています。枝肉にシールを貼るといった作業が発生しますので、と場での負担が増えますが、枝肉になって出荷するまでが JAS の範囲になっていますから。他の農場で JAS 認証をとろうと思っても、と場の作業工程であきらめる場合が多いんじゃないでしょうか。我々の場合、と場が協力してくれたので認証取得が実現したんです。」

昨年度の事例の十和田湖高原ファームも食肉処理の業者の協力を得て実現したケースであったように、畜産の場合、食肉処理をしてくれる業者が協力してくれないと実現が難しい。生産主体に加え、川下の体制も整えていくのが今後の全国的な課題だろう。

(5) 消費者へ提供する情報

消費者に対する情報公開は、ホームページ上で行っており、豚群識別番号を入力する形式になっている。しかし、JAS 対応品については、JAS シールが貼られた商品はまだ流通していない。これは川下の取り組みの関係である。

「現在、流通段階(直売所)での JAS 申請をしているところです。4 月、5 月あたりに認可がおりると思いますので、そうしたら直売所でもシールを貼って告知しようと思っています。まだ消費者まで伝わっているものはないですね。」(6 月にはシール貼付で販売されている)

JAS 認証は、小分け業者まで取得しているところはいくつかあるが、店舗がほとんど取得していない。ある大手量販店で数店舗が取得した程度である。

「流通段階まで JAS 取得が進まないのは、JAS を取った生産者から豚肉を入荷してその生産履歴を見

たら、治療歴のリストがたくさん出てきて、これを消費者にそのまま公表していいのかということで足の踏んでいるということではないでしょうか。お客さんから問い合わせがあれば履歴を出すということであればいいんじゃないでしょうか。」

OK 牧場は、投薬プログラムは全て公表するようになっている。投薬だけでもかなりのリストがあがる。複数の薬を使うと、ほんの少しの使用量でもデータ上では“使用した”ということになる。例えば肺炎でも 2 種類の薬を使えば、それだけ情報が重なっていくことになる。子豚の時から 1 つの薬だけを与えていくことができれば問題はないが、実際の治療などではそうはいかないのである。

「我々は、それを隠そうというつもりはありません。それでお客さんが買わなかったら、それはそれで仕方がないと思いますし。バイヤーさんはこういった取り組みへ賛成はしてくれますが、店舗で実際に展開するかというと、なかなか取り扱ってはくれないですね。おそらく、店舗側は難しく考えているんじゃないでしょうか。例えば、牛の個体識別並みの厳密な管理をしないといけないと思っているのではないのでしょうか。豚群で管理しているので、同じ日に入れた豚肉は同じ識別番号になるので、牛の場合より簡単なのです。」

トレーサビリティの取り組みによって情報の透明性が確保できる一方、従来の消費者の常識では理解できない情報が彼らに渡される。豚の疾病に対する情報など知らない消費者は、投薬情報に過剰に反応することもあるだろう。こうした部分は、業界全体で正しい知識を普及する必要があるだろう。

(6) システムのモニタリングや監査の仕組み

OK 牧場は、前述の通り、生産情報公表 JAS 規格認定を受けた養豚農場である。そのため、登録認定機関によって、年に 1 回、規定どおりに運営されているかといった調査が行われることとなる。



直売所のケース

4 評価と今後の課題

トレーサビリティシステムとして、豚歴や MNFIS を入れたことで、JAS 対応ができたということがメリットの1つとしてあげられるが、他にもいくつかのメリットが生まれた。

「在庫数が確認できるので出荷計画が正確にできるようになって、豚房の空き状況の把握や人員の配置などを含めた農場管理がしやすくなりました。そういった経営面でのメリットが全体の8割以上だと思います。消費者に安心を与えるという部分は残りの2割あるのかどうかという程度ですね。」

昨年の事例でも、トレーサビリティシステムの導入が経営管理に役立ったというケースがあったが、ここでも同じことが確認された。特筆してよい事項であろう。また、システムを入れたことで治療回数が減少するという効果もあったそうである。

「みんな台帳に記入するのは面倒ですからね。以前から投薬するかどうか迷ったら、投薬するなどは言っているのですが、何かあったらいけないと思って薬を使うことがあったんです。」

しかし、システムを入れてからは、いちいち野帳に記入してから台帳に写すというのが面倒なので、投薬をやめようということが多くなったようです。しかしだからといって事故や病気が増えたということはありませんでした。それはつまり無駄な治療が減ったということだと思います。さらに、投薬を減らすため治療数を全体的に抑えようという気が起きて、健康にするにはどうしたらよいかをより一層考えるようになりましたし、早めに病気を見つけて治療しようと深く

注意するようになったようです。そういった意味で治療回数が減って、薬代も安くなりました。」

今後の課題のひとつとして、薬品使用量の管理がある。現在 OK 牧場では、薬品の使用量の管理は書面上で行われている。

「豚歴では、何の薬を使って治療したという履歴は記録されているので確認できるのですが、どのくらい使ったかは記録できないので、使用量については書面で残しています。いつ在庫をどのくらい仕入れて、いつどの豚房でどのくらいの量を使ったという履歴を紙に残して、それを在庫と照合することで使用量の確認をとっています。その書面と豚歴とは、いつ使ったという部分を照らし合わせています。休薬が守られているかどうかをきちんと管理するためには、そういったことがわからないといけませんので。」

「畜産でもポジティブリストの話がきています。今後は、JAS をやっている、やっていないに関係なく、管理をしていかななくてはならないんですよね。ポジティブリストの場合、使用量、用法を確実にしていかななくてはならないので、今後はどのくらい使ったかの履歴も残していかななくてはならないんですが、現在でも、豚歴の休薬期間チェック機能などは、ポジティブリスト制度への対応を先取りした機能だと思います。そういった意味で、我々は既に豚歴を使った管理をしているので、今から逆に楽なんじゃないかと思います。」

トレーサビリティに対応することで、今後の策定される様々な制度に対して、スピーディーに柔軟な対応をとれる可能性というメリットもあるようだ。

また、「今後、パソコンを使って情報を管理できるということがわかれば、次の若い世代の人は取組みやすいんじゃないかなと思います。」というお話があった。トレーサビリティシステムの構築をきっかけに、畜産経営にたずさわる次の世代を創生することにもつながっていくのかもしれない。